

知化—社会的遺伝子（ミーム）の獲得

“人間は生まれ持った遺伝情報以外に、人類全体が時空間を超えて蓄積してきた知識を後天的に獲得していくことができるのです”

人間分子の能力差は遺伝的に50%程度決まっていると考えられています。残りの半分は、広い意味での環境、つまり後天的な要因に依存しています。人間は生まれ持った遺伝情報以外に、人類全体が時空間を超えて蓄積してきた知識を後天的に獲得していくことができるのです。このような人類共通の知をミーム（社会的遺伝子）と呼びます。ミームは、周囲の環境の影響を強く受けながら、人間分子の経験を通して獲得されていきます。そのような直接的経験は、脳回路に対する強い入力であり、ミームの獲得に決定的に重要ですが、人間分子の時間は限られています。そこで、書物やその他の芸術作品（映画・演劇・漫画など）を通じて、主人公や登場人物に自己を投影して仮想的に人生の擬似体験を行い、時間を圧縮して様々な人生を経験し、学習を繰り返していくのです。多様な入力を与えられた人工知能が高性能を発揮するように、多様な書物をシャワーのように浴びた脳回路と、読書と無縁であった脳回路では、年齢と共にその応答性に大きな違いが生じることでしょう。我々の肉体は、我々の食べたもので出来ています。多様な食べ物によって作られた頑強で美しい肉体と、偏食・拒食・過食でバランスを崩した食生活による貧弱なあるいは肥満な肉体との差は、一目瞭然でしょう。我々の知性も肉体同様、読んだ書物の量と質によって形作られるのです。知性は、肉体のようにあからさまに見えないだけに、その差が認識しづらいだけなのである。

現代は情報に溢れています。書物だけでなく、インターネットなどを通じて膨大な情報が存在しています。ミームの獲得には、高質で多様な知識の脳への入力が不可欠です。1つ確実なのは、多くの批評・批判に耐え、世界的に長く読み継がれてきた書物にはやはり重要なミームが含まれている可能性が高い、ということです。インターネットなど現代の溢れる情報の特徴の一つは、リアルタイム性です。多くの生物が自然淘汰の上に絶命し、消えていったように、リアルタイムで溢れる膨大な情報のほとんどが、数年後には全く無価値となっていることでしょう。人間の幸福が、生物的遺伝子（ゲノム）や、社会的遺伝子（ミーム）のような人類共通の堅牢な情報基盤に成り立っているとすれば、我々はもう少し名著に時間を割くべきではないのでしょうか。毎日30分新聞を読む、毎日30分インターネット情報に目を通す人はある程度いるかもしれませんが、毎日30分名著を読む人はどれほどいるのでしょうか。しかし、名著30分と、リアルタイム情報30分が、我々の知化さらには幸福に及ぼす影響の差は、計り知れないものがあります。リアルタイム情報は、ほとんどが消費財であり、幸福の収支決算にとって重要な代表的無形財産であるミームをあまりにも軽視しがちであるように思われます。

我々は、人生でいろいろな困難に出会います。多くは、恋人（伴侶）・友人・家族、などの力添えで乗り越えていけるものです。しかし人生、どうしても、たった一人で立ち上がり、立て直さなくてはならない試練があるものです。そのような時、古今東西、長く読み継がれてきた名著の中には、必ず、迷い傷ついた人間分子の傍らに寄り添い、貴重なアドバイスをくれる、仮想的な友人が存在するものです。我々の人生には教本がない（芥川龍之介）と言われますが、存在はしているのです。ただ、適切なタイミングで我々がそれに出会えるか、が問題なのです。書物に親しんでいる人には不思議とそのような劇的な出会いがあるものです。書物に無縁な人には永遠にその出会いが訪れないだけなのです。

好奇心旺盛な人にとっては、新しい知識の獲得＝知化そのものが直接的な幸福要因となりえますが、知識は、同化・機化・質化といった他の幸福の内的要因を下支えするものです。河川敷を散歩していて、そこに咲く草花の種類・名前・匂を知っていれば、歩くたびに自然の彩が変わり、季節が巡ることを意識できるでしょう。その植物が希少なものであるのか、汎用なも

のであるのか、食用なのかそうでないのか.....場合によっては、摘まれて家の花瓶を飾るか、食卓に上ることもあるでしょう。阿部公房の名著「砂の女」^[1]で、蟻地獄から何とか脱出しようとする主人公が、蟻地獄の地下水位の変動メカニズムに興味を持ち始め、いつの間にか蟻地獄の底での生活に生きがいを見出すようになります。知識＝好奇心が幸福度に影響を与える好例です。無人島生活においては、食べられる植物・海産物の種類、飲料水を確保する方法、暖を取る方法、など知識・好奇心の維持は生死を分ける大きな分かれ目となったことでしょう。

[1] 阿部公房、砂の女、新潮文庫